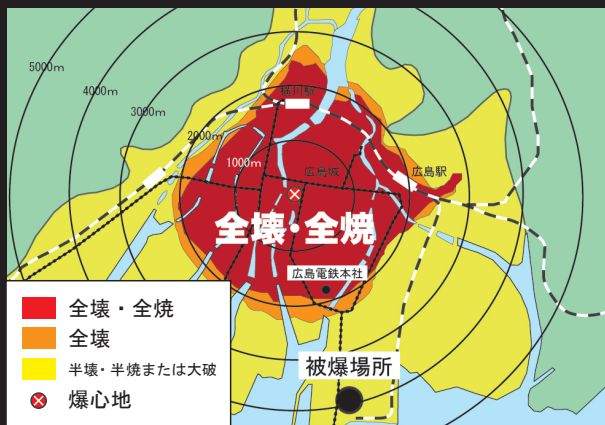


→爆発の瞬間、巨大な火球から強烈な熱線が放出され、周辺の地表面は3,000℃、4,000度にもなり、最大風速440m/秒の強烈な爆風が放射状に広がり、約10秒後にはほぼ市街全域に達しました。小椿さんが務めていた広島電鉄本社、そして当時、住んでいた寮も全壊し写真などもすべて全焼。死者は約14万人。



広島電鉄に勤務していた
小椿 朝子さん(金田)

この全世界から1日も早く
戦争や核が無くなることを
願い祈るばかりです。

広島原爆

あの日、電車の中で背中に感じた恐怖

何げない朝、いつも通り車掌として乗客を安全に運んでいた小椿さん。その時、背後に感じた恐怖。その瞬間、日常は恐怖へと変わった。



昭和20年4月に広島県の尋常高等小学校を卒業後、14歳で広島電鉄に入社した小椿さん。私は、8月6日いつも通りに朝5時過ぎに出勤し、車掌として乗客を安全に運んでいました。爆心地から4km地点の鉄道局前電停(旧名)で乗客を降ろし、発車ベルを「チン」と鳴らしたその時でした。「ピカッ」と光り、私は背中を刺されたような熱さを感じました。同時に電車は止まり、一瞬あたりは真っ暗に。急いで乗務員とともに防空壕へ避難。その後、五日市の避難所へ歩み始めると周りの建物の壁は崩れ落ち、電鉄

社員の人たちは、顔から血を流していました。しばらくするとひどく怪我をした人たちが肌と肌が触れ合う狭さで立ったまま乗せられた軍隊のトラックが目の前を通り過ぎ、私たちが向かっている避難所のほうへと進みました。その少し先に、小さな子どもがうずくまっており、衣服は朽ち、肌は灼熱に焼かれ、息の無い母に「お母さん、水、水」と強く訴えていました。私は、なにもできず「ごめんなさい、ごめんなさい」と言つて胸が張り裂けそうな思いでその場を去つたのを覚えています。8月6日8時15分、原爆が上空600mで炸裂し、多くの人の命や思い出すべてを一瞬にして奪い去り、被爆後の恐怖や身体の不調などの影響は今でも残っています。あの日のことは1日も忘れることはありません。たくさんの方々の尊い犠牲の上に、平和があり、私はこれまで生きてこれました。全世界で戦争が無くなり、二度とこのような無残な出来事が起こらないよう毎日、祈り願っています。

特攻

母国のため家族のため命を燃やす

葛藤や恐怖を抑え特攻隊へと志願した永末さん。終戦を迎えて特攻待機が終わり、救われたこの命。戦友たちが残した思いや築いてきた平和を守るために。

神

風特別攻撃隊(特攻隊)とは第二次世界大戦期に日本海軍によって編成された爆

装航空機で体当たりを行う攻撃部隊。日本の劣勢が濃厚となっていた第二次世界大戦末期、本土防衛のため沖縄を死守する目的で編成されました。永末さんは、沖縄に来攻する連合国軍に対し特攻攻撃を実施した日本海軍の作戦「菊水作戦」で編成された白菊特攻隊に志願し配属されました。いっ出撃命令がでるかわからない状況の中で、死ぬための訓練は続けられました。菊水作戦は1号から10号まで行われ、118



神風特別攻撃隊に配属された
永末 千里さん(弁城)

↑田川商工学校を卒業後、昭和18年8月に鹿児島海軍航空隊に入隊。昭和20年3月に大井海軍航空隊神風特別攻撃隊として特攻隊の訓練を行いました。昭和52年2月に定年退職し、後世に戦争を伝えるべく、戦争に関する本を11冊出版。令和元年8月4日に逝去。



昭和18年11月に初めての飛行訓練を行い、初めて味わったスピードに興奮したという永末さん。

機が帰らざる攻撃に参加し、約230人の若者が命を落としました。神風特別攻撃隊に配属された時は、死を覚悟したものの、家族や故郷を思い、死への恐怖が強くなり、覚悟も薄れ、この時に「生」への執着がいかに強いものであるかを知ったという永



↑神風特別攻撃隊 八洲隊(第3大隊第3中隊)の結成当初の集合写真。永末千里さんは中央列向かって2人目。

末さん。そして特攻隊編成から3か月、沖縄戦は終戦を迎えて白菊特攻隊による作戦は中止され、特攻待機を解かれました。永末さんは定年退職後、特攻隊員の精神的苦難を克服し、死地に向かった戦友たちを慰霊するため、そして二度と戦争で命が奪われることがないように自身の体験をもとに11冊の本を出版しました。戦争によって約4000人の若い特攻隊員らの人生が奪われました。その先人たちが命をかけて戦い犠牲となった上に今の平和があることを我々は決して忘れてはいけません。



永末千里さんの甥子
永末 猪年さん

体験者の貴重な声を
風化させず伝える

千里さんは、戦争の真実を伝えるために本の出版やメディアへの出演などもしていました。私にもよく自身の戦争体験や大東亜戦争で戦死した私の父(千里さんの兄)についても詳しく話してくれました。戦争体験者のリアルな声は重く私の心に響きました。あの戦争を体験した世代は今、多くのかたが90代を越え、語る人は、少なくなっています。その貴重な戦争体験者の声を私たちがしっかりと伝え、後世が歩む平和への道しるべとなつてほしいです。